

## 周口店遺跡見学記

神谷英利\*

### 周口店へ

シンポジウム2日目の10月6日午後に北京人(北京原人)の発見地としてあまりにも有名な周口店遺跡の見学会があった。周口店(Zhoukoudian)は北京の西約60kmにある村(集落)で、その少し北側にある石灰岩からなる小高い山が周口店遺跡のあるところである。

午後2時頃に研究所前からバスに乗って出発、日本人参加者を始めとして、中国の研究者も参加している。今回のシンポジウムには古生物分野以外の中国の研究者も多く参加しているが、彼らにとっては周口店遺跡はすでに何回も来ていて見飽きたと言うものではなく、むしろ訪問することは数少ない機会のようなものである。天気はくもりでありよい天気とは言えない。それよりふだんは晴天と言っても空はスモッグがかかっているようにはっきりしないのが、今回北京に着いてからの毎日だから、今日も本当の所は判らない。北京市内をはずれるにつれて中国の田舎の風景が少しずつ見えてくるようになった。しかし、高速道路が終わるとたいへんな車の渋滞で、排気ガスと土ホコリでいささか気分的にも疲れを感じるようになって来てまもなく周口店遺跡前に到着した。

入口の広場から石段を数十段か百段か上ったところが少し広い平坦地で、入場券売場、売店、事務所などがあり、さらに少し上ったところに博物館が建っている。私自身は10年以上前に最初にここを訪れたが、これらの建物はその当時とあまり変わっていない感じである。中国が世界に誇る貴重な遺跡とその博物館であるが、基礎学術部門における財政事情はどこの国でも同じようである。今日の見学会の案内者である古脊椎動物与古人類研究所の金昌柱博士(Dr. Jin Changchung)がいろいろと説明をしながら案内してくれた。

### 金昌柱博士

金博士は新生代の小型哺乳類化石の専門家で、日本語が堪能なので以前からわれわれ日本人研究者が中国を訪れるたびにお世話になって来た方である。数年前

日本の大阪市立大学理学部地球学教室(担当:熊井久雄教授)に2年以上滞在され、第四紀の小型哺乳動物に関するテーマで同大学から学位を授与された。なお、日本における実質的な指導は主に愛知教育大学の河村善也氏が当たり、また、実際の仕事は大阪市立自然史博物館で樽野博幸氏らの協力で行った。私自身も金博士が大阪におられたとき時々京都におまねきして話をしたことがある。現在は研究所において周口店の研究に関する責任者の立場にあり、今後の博物館の充実などに尽力されている。来年秋には周口店遺跡発見70周年記念の国際研究集会を開催すべく準備を進めているという事である。今回はちょうど南部の安徽省で化石発掘の最中だったが、我々のために仕事を中断されて北京に戻って来られたのである。今回も一同大変お世話になってしまった。

### 北京人と山頂洞人

博物館を見学した後その背後にある遺跡の見学に向かう。最初に山の上の方に登って、「山頂洞人」の遺跡を見学した。ここは北京人の遺跡より位置的にずっと上流にある小さな洞穴で、北京人よりもはるかに若い約1万8000年前のいわゆる新人の人類遺跡である。1930年に初めて10個体分の人骨が発見された。山の上(山頂)近くにある洞穴から発見されたのでこの名が付いている。北京人以来ここに人がよく人が住みついていたことが判る。山頂洞からは周辺の地形がよく見渡せる。少しかすんでいるが平地に直接のぞむ石灰岩山地である事が判る。前に来たときは下に鉄道の周口店の駅が見え、貨車に石炭が積み込まれていた。山頂洞を後に下がっていくと、1923年に初めてヒトの歯が発見され、ついで1929年に「北京原人」の頭蓋骨が発見された地点に到着した。石灰洞を充填していた堆積物はほとんど取り除かれているため、全体が大きな空洞のような感じになっている。その空洞の岩壁に堆積層の順序(層序?)が示されている。この遺跡は1930年代に行われた大発掘では人類遺物のほか多数の動物

Hidetoshi Kamiya

Visit to Zhoukoudian Pekingman site

\* 京都大学理学研究科地質学鉱物学教室

化石なども発見されたが、この発掘調査は当時としてはきわめて組織的・科学的なものであり、それを成功させた斐文中や賈蘭坡など当時の中国の人類学者の力を伺い知ることが出来る。しかしまた、良く知られているように、この重要な「北京原人」の頭蓋骨の標本は第二次世界大戦の初期の1941年12月に戦火からの避難途中に日本軍が関わる混乱状態の中、行方不明となり現在に至っているのである。山頂洞人の標本も同じ時期に行方不明となっている。真相はいまだくわしく判らないとされるが、日本の中国への侵略がこのような事態を引き起こしたことは明白である。周口店を再び訪れてかつて日本が中国に対して如何にひどいことをしたか、改めてそのひとつにふれた思いがしたのである。

北京人はよく知られているように初め *Sinanthropus pekinensis* として記載されたがその後の研究により、インドネシアのジャワ人 *Pithecanthropus erectus* と同じものとされ、現在では *Homo erectus* として一括されている。ただし、ジャワ人は100万~70万年前と北京人の50万~23万年前に比べてかなり古い。インドネシア・ジャワ島東部のジャワ人の産出地点を含む地域は、日本とインドネシアの長い間の共同研究により、詳しい地質調査がなされ正確な層序が判ってきた。私も何度かジャワ人の最初の発見地、トリニールや最近の主要な発見地のサンギランを訪れたが、いつも何か特別な感情におそわれる。周口店でもそれは同じである。



図1 周口店博物館の展示を見学する参加者

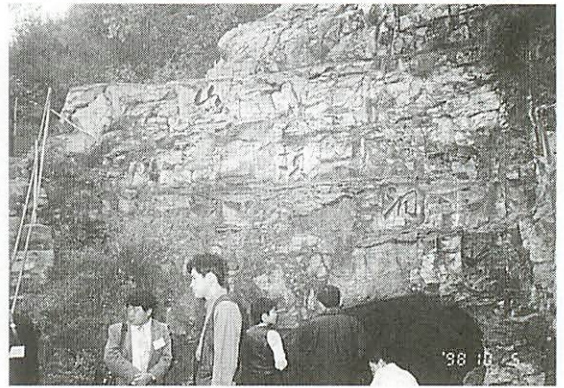


図3 山頂洞遺跡の前で(岩肌に山頂洞と彫ってある)



図2 展示の解説をする金昌柱博士

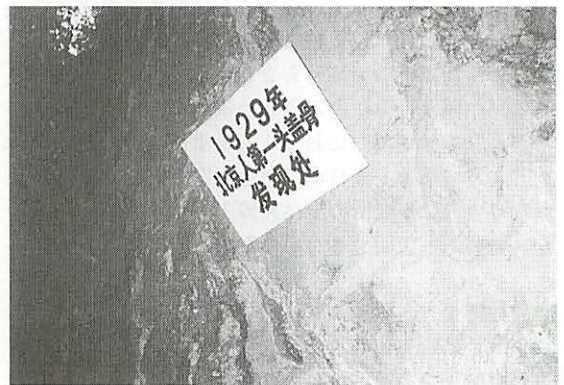


図4 1929年に最初の北京人の頭蓋骨が発見された位置